

ロシア・ 中国・西側

●スターリンの死から文化大革命まで

アイザック・ドイッチャー
山西英一 訳

RUSSIA, CHINA, AND THE WEST
1953-1966



序文

フレッド・ハリデイ

本書は、一九五三年から一九六六年までの間に、アイザック・ドイッチャーが世界中の新聞や雑誌に発表した、おびただしい数に上る論文の中から選択し、再編成したものである。

これらの論文は、ドイッチャーの全体的な分析作業の一部を成すもので、この時代に関する歴史の研究者にとっても、マルクス主義の研究者にとっても、永遠の価値を持つものである。

本書と同じ重要性を持つドイッチャーの論文集としては、『Russia in Transition (『変貌するロシア』)』、『Heretics and Renegades (『異端者と背教者』)』、『Ironies of History (『歴史のアイロニー』)』がある。しかし、これらの論文集はそれぞればらばらに書かれた論文を収録したものであるのに対して、本書はそれぞれの論文が取り扱っている諸々の発展の系統的解説となることを目指して、各論文の叙述の順に提示した。

ドイッチャーは、この時代の系統立った歴史を書いていないし、すべての主要な出来事について、一々解説も書いていないので、様々な論文をまとめて包括的な一卷を生み出すということが不可能である。しかし本書においては、各論文を幾つかの章に整理し、各章の初めに、前書きとしてその章で述べられている出来事に関する歴史的背景の要約を付けることによって、かなり系統的なものにすることができた。この前書きにおいて私は、様々な出来事が、当時どのように受け止められていたかを示そうと努めた。この時代について詳しい人々には、こうした前書きは不必要であろうが、しかしこの時代の様々な発展を経験しなかったり、忘れてしまったりした人々には、前書きと巻末の年表はなんらかの助けになるだろうと考える。

この時代の時事問題に関するドイッチャーの論文は、およそ三十万語ほどになるが、そのうち約三分の一を本書に収録した。論文を取捨選択するにあたっては、まず第一に、いかに興味深いものであろうとも、他の論文集に収録されてくるものは除外した。第二に、中心テーマが、ロシア、中国、及びこれら二国と西側との関係を扱った論文だけに絞った。このため、ロシアの軍事戦略、一九六〇年における朝鮮の事件、一九六四―六五年のアメリカ合衆国における「雪解け」といった興味ある問題に関する論文も除外せざるをえなかった。第三に、同じ事件を扱ったものや、短期的な問題を扱った論文も除外した。各論文の見出しは、ドイッチャー自身が付けたものもあるが、彼が見出しを付けていなかったり、より今の時代に合った見出しが必要な場合には、私が新しい見出しを付けた。各章の中の小さな見出しや、章の中の各論文の配列は私が行った。

本書の各論文は、最近の時代の共産主義世界における重大な発展の多くを取り扱っており、ドイッチャーの仕事の不可欠な一部となっている。彼は、現代における最も偉大なマルクス主義的著述家の一人であって、彼の目的は、その始まりから今日までのソ連の徹底的なマルクス主義的分析を行うことであつた。当初ロシア革命を支持した多くの人々にとって、スターリニズムの発展は、マルクス主義の信用を傷つけるものに思われ、結局それを拒否するところとなつた。一方マルクス主義者であることをやめなかつた者は、ソ連で起こっていることに目をつぶることによつてのみ、なんとかマルクス主義者としてとどまつたのである。前者にとっては、ロシアを率直に分析することは、マルクス主義と一致しなかつた。後者にとっては、この最初の社会主義国におけるあらゆる発展は、守られるべきものであり、忠実に支持すべきものであつた。彼の時代におけるこの知的、政治的な二分法ディコトミーを超越したことが、ドイッチャーの業績であつた。彼の著作は、ソビエト・ロシアの進展はマルクス主義を無価値なものにしなかつたばかりでなく、またマルクス主義者は、ロシアで起こっていることをあるがままに認めることができ、ただマルクス主義と、政治的な出来事のマルクス主義的分析を通してのみ、初めてソビエトの過程と方向を理解でき、個々の出来事をその歴史的展望の中で見るができるということを、明らかにした。

原注¹

ドイッチャーの主要な著書は、トロツキーとスターリンの伝記であった。しかし、彼が主として力点を置いたのは、ロシア革命そのものと、その指導者たちについての解説であったにもかかわらず、彼は常にこのソビエトの経験の持続性を意識していた。一九五〇年代と六〇年代のロシアを分析しながら、常にドイッチャーはロシア革命そのものに照らしての、この時代の出来事の意味に気付いている。

ドイッチャーにとつて、フルシチョフとコスイギンは、レーニンとトロツキーの後継者であったばかりでなく、これら初期の指導者たちの政策を続けたり、裏切ったりした人物であった。彼は彼の講義に『未完の革命』という題を付けたが、この題は、彼の展望と中心的な関心を要約していた。現代ロシアにおける様々な出来事の歴史的意思是、この最初の「社会主義国家」の諸問題と失敗との両方を意識しているマルクス主義的観察者によつてのみ、初めて完全に理解されることができ得るであろう。ロシアは今日まだ、ボルシェビキが一九一七年に課した任務を完成しなければならぬ。解説者たちの中には、ロシアを静的な、全体主義的怪物として分析した者もいる。ある解説者はまた、ロシアは、資本主義とブルジョワ的西側に近づいていることを、躍気になつて示そうとしている。ドイッチャーはこうしたアプローチを二つとも拒否して、ロシアの発展を、社会主義的な歴史の状況の中にしっかりと据えた。理論的体系としてのマルクス主義は、その敵、つまり資本主義の分析によつてだけ正当化されるべきではなく、ロシア国内やその他の国のマルクス主義の友と称する人々の分析によつても証明されなければならなかつた。

スターリン死後のロシアと中国に関するこれらの論文は、彼の伝記への補足である。この二つの関係は、マルクスのフランスに関するジャーナリスティックな著書『フランスにおける階級闘争』と『ルイ・ボナバルトのブリューメール十八日』と、もっと重要な『資本論』との関係に似ている。より分析的な『資本論』においては、社会と歴史的發展は、完全に調査され、それらの理論的含意は研究されている。一方比較的軽い論文においては、理論的要素はそれほど現れてはいないが、しかし現代の出来事に照明を当てるために利用されている。

ドイッチャーが彼の著書にもたらすこの大きな歴史的、理論的意味に加えて、これらの論文はまた、再三起こつて

は解決されない諸問題を論じている点で重要である。ロシアにおける未完の革命の問題や、スターリン支配の遺産の問題は、今日でも残っている。「社会主義」陣営は、まだロシアの指導下の一枚岩的な統一から、より民主的な同盟制度への移行に成功してはいない。一九六八年のチェコスロバキアにおける事件は、非スターリン化された社会主義の様々な歴史的可能性と、スターリンの後継者たちがそうした可能性の実現を妨げている障害との双方を論ずるすばらしい機会を、ドイッチャーに提供したことだったろう。

ドイッチャーの著作が共産主義圏で初めて出版されたのは、チェコスロバキアの雑誌『ステューデント』と『リタライ・リステイ』が、『未完の革命』と『スターリン』の抜粋を連載したときであった。『スターリン』全巻を出版する計画は、八月侵入によって中止された。原注

中ソ紛争は、依然として全世界の政治にとって極めて重要であり、その理論的諸問題は、革命に関する、そしてまた革命後の社会の性質に関する社会主義政策の発展にとって中心となるものである。再びドイツ問題が持ち上がって討議される場合には、一九五〇年代のあの討論の問題と関心が残るだろう。

その時々的事件に対するドイッチャーの分析の多くは、当時一般に唱えられていた説と矛盾していたため、信じ難いとして、拒否された。バートランド・ラッセルは、ドイッチャーの分析に対して当初抱いていた彼の疑いが、いかにして消え去ったかについて、次のように書いている。

ハンガリーとスエズ問題のあの時期に、故アイザック・ドイッチャーは、リチモンドの私の家によくやってきたものだ。彼が冷戦に関する意見を開陳するのを、私は座ったまま黙って聞いていた。証拠を入念に評価し、対立する意見を均衡をとって述べるところは、常にいかにも学者的だった。私にとって、三十年代の粛清と、偽物の裁判の後に続いたスターリンのテロと、東欧全体に一党国家を導入したことは、異端をいやなものに、考えることさえいやなものにした。ところが十年後になると、ドイッチャーはもっと説得力を持ってきた。一九六五年五月、

カリフォルニアのバークレーにおけるティーチ・インで、彼は冷戦に関する見解を要約して語った。ロシアは第二次世界大戦で二千万の死者と、何百万とも知れない負傷兵を出した。戦争はその領土で、西側では知られないほどの凶暴さであちらこちらで戦われ、その経済と工業は灰燼と帰した。これが、それ以外のヨーロッパを大西洋にまで席卷しようとしている、といわれていた国民の姿であった。

彼の中ソ紛争の分析もまた、共産圏の永久的な統一を信じ込んでいる人たちに不信をもって迎えられた。今日、彼のその分析は、明白に正当化されている。

ドイッチャーの予言は、いつも正しいというわけではなかった。時事問題について書く人間ならだれであれ、いつも正しいなどということはありえない。しかし、当たってはいようが、間違っていようが、彼の分析と予言の価値は、彼が個々の出来事と、ソビエトの歴史の底にある政治的傾向との関係の、より広大な重要さに、いつも気付いていたことである。

『大いなる競争』(The Great Contest)の序文の中で、ドイッチャー自身、直接毎日毎日の展望の中で国際政治を見ている人たちとは対照的な、その時々々の外交政策への自分のアプローチの仕方を、次のように書いている。

どの政府の外交政策もそうであるが、特にソビエト政府の外交政策は、その国内政策の延長である。このことは、「頂上」会談の時期には、ほとんどいつも忘れられてしまう。こうした時期には、世論は、三人か四人の世界の首脳が世界の難局を解決するのに失敗するか成功するかは、一にかかって彼らが彼らの任務を達成するのに必要な英知、善意、ないし魔法の杖を持っているか否かによって決まるかのように、とかく信じ込まされてしまうからである。私はソビエトの政策の本質的な動機と長期的な熱望に焦点を絞り、世界外交の現状の特徴となっている「恐怖の行き詰まり」を探ろうとしてきたのである。

時代の出来事の背後にある「本質的な動機と長期的な熱望」へのこの関心は、本書に収録された論文に一貫して流れている。様々な時事問題の直接さと新鮮さは、長期的な歴史展望と融合している。

最後に私は、タマラ・ドイッチャーが、彼女の亡き御主人のこれらの論文の編集にあらゆる援助を下さったこと、そしてこうした編集をするようにと最初に勧めて下さったことに感謝したい。彼女の助言と励まし、そして忍耐は、無限に貴重な助けとなった。

本書に収録された諸論文は、ドイッチャーが契約していたシンジケート組織（契約した各国の定期刊行物に同時発表するための組織）の論文から引き抜いたものである。これらの論文は、送付先の新聞、雑誌によっていつも印刷されたものとはかぎらないし、またこれを掲載した新聞、雑誌も、書き換えたり、編集し直したりしたかもしれない。これらの新聞、雑誌には、次のようなものが含まれている。

The Sydney Morning Herald (オーストラリア) / Estado de Sao Paulo (ブラジル) / Winnipeg Free Press (カナダ) / Montreal Star (カナダ) / Ceylon Daily News (セイロン) / L'Express (フランス) / Nouvel Observateur (フランス) / Deutsche Zeitung (ドイツ) / To Vima (ギリシャ) / The Statesman (インド) / Davar (イスラエル) / Corriere della Sera (イタリア) / L'Espresso (イタリア) / The Press (ニュージーランド) / Dagbladet (ノルウェー) / The Times (イギリス) / The Observer (イギリス) / New Statesman (イギリス) / The Reporter (アメリカ) / The Nation (アメリカ) / 朝日新聞

原注1 「もちろん私は、マルクス主義者です。私を「盲信的」だと言い、私が「何も学ぼうとしない」と言う、これらの批判者たちは、その大部分が、かつてスターリンの教義を信じ、後になって反共主義に転じた人たちです。私は、スターリンも、フルシチョフも、毛沢東も、そして言うまでもなく西側の反共主義も受け入れたことはありません。私にとっては、マルクス主義は

決して誤りのない論理ではありません。しかしマルクス主義は、世界観として、分析の方法として、決して時代後れでもなければ「乗り越えられた」ものでもないというのが私の意見です。こうしたことは恐らく、マルクス主義にもいつかは起こるでしょう。しかし、それはまだ遠い先のことです。今日「マルクス主義の時代錯誤」を語る人たちは、知的にも政治的にもマルクス主義を凌駕した何かを、提供してはいけません（アイザック・ドイッチャーが一九六七年七月二十三日に、ハンブルグ・テレビの求めに応じたインタビュウから。なおこのインタビュウは、アイザック・ドイッチャー著『レーニン伝への序章 その他』山西英一、鬼塚豊吉訳、岩波書店刊の中の「ドイツとマルクス主義」として収録されている）。

原注2 一九六八年八月二十二日付『ブラウダ』の有名な論文は次のように書いている。「チェコスロバキアの新聞は、マルクス・レーニン主義の明白な敵対者たちの著作に、進んでそのコラムをさいている。これは、チェコスロバキアの多くの定期刊行物に、有名なトロツキストであるアイザック・ドイッチャーの著書からの抜粋や記事が掲載されていることからもはっきりしている」。

目次

序文	1
第一章 ベリヤの失脚	5
裁判の前	
ベリヤ銃殺さる	
第二章 一九五四年におけるソビエト対外政策の発展	21
スターリン死後一年——ソビエトの対独政策	
極東に関するジュネーブ会議	
モスクワの新しい路線——ロシアと中国	
モスクワの新路線と東欧の変化	
第三章 マレンコフの失脚	42
マレンコフ辞任の背後にある諸問題	
軍部の台頭	
フルシチョフとブルガーニンの役割	
第四章 マレンコフの後継者たち	55
一枚岩主義からの後退——ベルグラード訪問のフルシチョフ	

ドイツの現状	
第五章 第二十回党大会	66
スターリニズムとの決別	
第二十回党大会における外交問題	
第二十回党大会後のソ連	
スターリンとソビエト指導部	
モロトフ辞任す	
第六章 ソビエト・ブロックの危機	96
ポーランドとハンガリーの反乱	
東欧の危機の原因	
シエビーロフの退場	
マレンコフ、攻撃に転ず	
第七章 毛沢東と百花斉放運動	119
百花斉放、百家争鳴	
第八章 フルシチョフ、優位に立つ	130
フルシチョフの経済改革	
反党グループ	
フルシチョフとマレンコフのスターリニスト的過去	
ソ連のボナバルティズム	

第九章

守勢に立つフルシチョフ

フルシチョフ、首相となる

ナジ・イムレの処刑

毛沢東、百花斉放キャンペーンを放棄

国内の反フルシチョフ派

フルシチョフ外交の崩壊

モスクワへの中国の圧力

156

第十章

第二十回党大会から第二十一回党大会へ

非スターリン化への過程

180

第十一章

フルシチョフの外交的イニシアティブ

ドイツにおけるソビエトの見通し

フルシチョフ、ワシントンに行く

ロシアと国際共産主義運動

U2号事件

頂上会談の崩壊

188

第十二章

中ソ関係の悪化

ブカレスト大会

アルジェリアと中ソ紛争

八十一カ国共産党会議

219

第十三章

スターリンの死から十年

キューバとインドシナ
中ソ休戦協定の崩壊

フルシチョフの個人崇拜

第二十二回党大会の衝撃

キューバ・ミサイルの危機

一九六二年の記録

スターリン死後十年目のソ連

第十四章

難渋するフルシチョフ

中ソ会談の崩壊

ロシアを襲う黒い砂嵐

深まる中ソの分裂

七十歳になったフルシチョフ

ソ連とルーマニアの対立

トンキン湾事件

第十五章

フルシチョフの失脚

フルシチョフ空位期間^{インヴァリデツム}の終わり

フルシチョフ失脚の結果

フルシチョフ後のソ連の行方

第十六章 ブレジネフとコスイギンの政策……………325

コスイギンの経済的逆改革

第二十回党大会と第二十三回党大会との間のソ連

一九六五年のソビエト外交

秘密スターリニストの台頭

第二十三回党大会——ベトナムの影

第十七章 文化大革命……………349

文化革命の意味

年表……………357

訳注……………366

解説……………370 山西 英一

索引……………390

ロシア・中国・西側——スターリンの死から文化大革命まで

は解決されない諸問題を論じている点で重要である。ロシアにおける未完の革命の問題や、スターリン支配の遺産の問題は、今日でも残っている。「社会主義」陣営は、まだロシアの指導下の一枚岩的な統一から、より民主的な同盟制度への移行に成功してはいない。一九六八年のチェコスロバキアにおける事件は、非スターリン化された社会主義の様々な歴史的可能性と、スターリンの後継者たちがそうした可能性の実現を妨げている障害との双方を論ずるすばらしい機会を、ドイツチャーに提供したことだったろう。

ドイツチャーの著作が共産主義国で初めて出版されたのは、チェコスロバキアの雑誌『ステューデント』と『リタラリイ・リストイ』が、『未完の革命』と『スターリン』の抜粋を連載したときであった。『スターリン』全巻を出版する計画は、八月侵入によって中止された。原注2

中ソ紛争は、依然として全世界の政治にとって極めて重要であり、その理論的諸問題は、革命に関する、そしてまた革命後の社会の性質に関する社会主義政策の発展にとって中心となるものである。再びドイツ問題が持ち上がって討議される場合には、一九五〇年代のあの討論の問題と関心が残るだろう。

その時々々の事件に対するドイツチャーの分析の多くは、当時一般に唱えられていた説と矛盾していたため、信じ難いとして、拒否された。パートランド・ラッセルは、ドイツチャーの分析に対して当初抱いていた彼の疑いが、いかにして消え去ったかについて、次のように書いている。

ハンガリーとスエズ問題のあの時期に、故アイザック・ドイツチャーは、リチモンドの私の家によくやってきたものだ。彼が冷戦に関する意見を開陳するのを、私は座ったまま黙って聞いていた。証拠を入念に評価し、対立する意見を均衡をとって述べるところは、常にいかにも学者的だった。私にとって、三十年代の肅清と、偽物の裁判の後に続いたスターリンのテロと、東欧全体に一党国家を導入したことは、異端をいやなものに、考えることさえいやなものにした。ところが十年後になると、ドイツチャーはもつと説得力を持ってきた。一九六五年五月、

第一章 ベリヤの失脚

一九五三年三月にスターリンが死んだとき、ソビエト指導者たちは、マレンコフを首相とし、フルシチョフを党書記長とする集団指導制を樹立した。これに続いて三月末には、制限付きの特赦令が発表され、四月三日にはクレムリン医師団に対する告発が撤回された。⁽¹⁾

これらの動きは、一九三八年以来、ラブレンティ・ベリヤを長官とする秘密警察の権力が減殺されたことを示すものであった。

「粛清者たちを粛清した男」として知られた彼は、スターリンの親密な仲間であった。七月十日に、彼が内相の職を罷免されて、逮捕されたことが発表された。彼は一般に、「人民の敵」として非難され、特にイギリスの情報機関がアゼルバイジャンで彼と接触した一九一九年以來、ずっとそのために活躍してきたとされた。彼はまたブルジョワ的民族主義を助長し、集団指導制を弱め、自分のため秘密警

察を使って権力を奪取しようとしたと非難された。間もなく、その前の月の流産に終わった東独の蜂起もまた、ベリヤの没落の有力な一因となったこと、そして恐らく彼は東独で、より自由主義的な政策を主張したことが分かった。この非難の真実がなんであれ、当時それについては何一つ触れられなかった。

ベリヤと彼の仲間たちは、七月に逮捕されたにもかかわらず、十二月まで裁判にかけられなかった。彼の裁判は、十二月十二日に始まった。十二月二十三日に、彼の有罪が判明し、直ちに処刑されたことが発表された。

裁判の前

一九三八年にベリヤがソビエト政治警察（当時内部人民委員部——NKVDと呼ばれていた）の長官になったとき、メキシコの隠れ家でトロツキーは、スターリンによって粛清されたベリヤの二人の前任者ヤゴダとイェジョフの運命をベリヤは逃れられないだろうと、不吉な予言をした。この予言は、今の中した。大逆罪とテロリスト的行動、祖国の国防破壊未遂罪で告発されたベリヤは、被

制作中

山西英一（やまにし えいいち）

1899年、静岡県に生まれる。1924年、広島高等師範、英語科卒業。

主訳書 トロツキー『ロシア革命史』『裏切られた革命』『中国革命論』
ドイッチャー『武装せる予言者』（共訳）『武力なき予言者』（共訳）『追放された予言者』
ノーマン・メイラー『裸者と死者』
『鹿の園』『ぼく自身のための広告』他多数。

ロシア・中国・西側

——スターリンの死から文化大革命まで

1978年3月27日 初版発行

訳者——山西英一

発行者——吉田 稔

発行所——株式会社ティビーエス・ブリタニカ

東京都千代田区三番町28番地1 秀和三番町ビル
郵便番号102 電話(03)230-0311

振替 東京1-131334

印刷・製本一凸版印刷株式会社

©Eiichi Yamanishi, 1978

0031-300027-4968

落丁・乱丁本はお取替いたします